



膣がん

(ちつがん)



※内容を簡素に記載しております。詳しくはHPをご覧ください。

膣がんについて

膣は、子宮頸部と外陰をつなぐ長さ6から8センチメートルの筒状の組織で、膀胱と尿道の後ろ、直腸の前にあります。

膣がんは表面をおおう粘膜から発生し、進行すると粘膜表面に広がったり、粘膜の下の筋肉、さらには周囲の臓器にまで広がったりすることもあります。大変まれな疾患で、その頻度は女性生殖器がんの約1%程度です。

膣がんには、主に扁平上皮がんと腺がんの2種類の組織型があります。この他、まれではありますが悪性黒色腫、肉腫、小細胞がんの報告もあります。

症状について

膣がんは初期症状がみられないことが多く、子宮頸がん検診などの検査で見つかることがあります。兆候として多い症状には、不正出血やおりもの(帯下)をはじめ、性交中の痛み、下腹部(骨盤領域)の痛み、排尿時の痛み、膣内のしこり、便秘などがあります。

検査と診断について

膣がんの発見と診断には、膣のほか、子宮頸部や子宮体部など骨盤内の臓器を調べる検査が行われます。検診などで細胞診を受けた結果、がんが疑われたときには、内診、コルポスコープ診、組織診を行います。がんの広がりを見る監査として超音波(エコー)検査、CT検査、MRT検査、PRT/CT検査などがあります。

治療について

膣がんの標準的な治療法は、手術(外科治療)、放射線治療、抗がん剤による化学療法です。治療方法は、がんの病期や組織型、年齢、全身状態など、患者さんのそれぞれの病状に応じて選択されます。

手術について

手術は膣がんにもっとも多く用いられている治療法で、レーザー蒸散術、部分膣壁切除、子宮全摘出術、骨盤除臓術、リンパ節郭清があります。

